

---

# 俺様と私の関係

羽月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺様と私の関係

### 【Nコード】

N9353U

### 【作者名】

羽月

### 【あらすじ】

人生最大の不幸が一度にやってきた。仕事も家も家族も恋人もなくなり、泊るところもなくなった。公園で、これからの事を考えていたら、急に声をかけられ車に乗せられて着いたところは、昔何度も来ていた幼馴染の家。その家に住むのは、俺様な幼馴染。一体、これから私はどうなるの!?

## 第1話（前書き）

この小説はあくまでもフィクションです。

ちよくちよくこんな事ありえないだろう！ということが書かれています。と思いますが、そこは読者様の広い心でスル をお願いいたします。

## 第1話

一体どうしてこんな事になったのだろう。

車を降りた先にはお城と呼んでもいいくらいのでっかい家。

ここには昔、何度も遊びに来た。

そう、それは昔の話だったのに……………。

「……………一体、なんで……………」

私は、見上げたまま目をつむりこれまでの事を思い出してみた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「……………これからどうしよう……………」

もうすぐで日も落ちる夕暮れの公園。

隣には大きな荷物が2つ。

22才。社会人1年目。小倉恋華<sup>おぐられんか</sup>。

「はあ……………」

ベンチに座り膝の上で頬杖をついている姿はどこからどう見ても哀愁が漂っているだろう。

今、私は人生最大のピンチに陥っているのだから、それもしょうが

ない。

「……ホームレスにだけは絶対なりたくない……」

年頃の娘がなぜこんな事を呟かなければならないのだろうか。

それもこれも、遡ること数日前。

それはそれは、人生の最悪な事がすべてその日にまとまってきたのではないかというくらい最悪だったのだ。

朝、家を出て会社に行ったままでは普通だったのだ。

しかし、今年4月に入社したばかりの会社に行ってみると、私の席には知らない女性が座っていた。

「あ、あの……。その席は私の席なんですけど……」

声をかけるとそこに座っていた女性はこちらを振り返ると好奇心丸出しで聞いてきたのだ。

「あなた、一体何したの？入社して4カ月でコレなんてありえないわ」

”コレ”と言って彼女が示した行動は親指を立て首の前を綺麗にその指が通って行った。

「……え？……」

彼女のとった行動に私は目が点になった。

「え？まさか知らなかったの？……あー……、とにかく部長の所に行った方がいいわよ？」

私の反応を見た彼女はばつが悪そうにそう言つと机に向かつて仕事を始めた。  
訳が分からない私とはにかく彼女に言われたとおりに部長のもとへ向かった。

「営業2課の小倉です」

部長室へ向かい扉をノックし、名前を名乗ると中から部長の声が聞こえた。

「……入れ」

その部屋に入ると部長は険しい顔をしてこちらを見た。

「失礼します」

「……そこに座りなさい」

応接セットのあるソファを指さされそこに腰を下ろした。

「……あ、あの。私の席に違う方が座っていたのですが、一体どういうことでしょうか？クビって……」

とにかく、彼女に言われたことが頭から離れなかった。

「……君は身に覚えはないのかね？」

鋭い目つきに私は怯みながらも、返事をした。

「あ、ありません」

「…………倉井 慶介という人を知っているだろう」

倉井 慶介…………。

もちろん知っていた。

大学時代から付き合っている3つ上の私の恋人の名前だった。しかし、なぜ部長がそれを知っているのか…………。

「…………はい。知っています」

「…………はあ…………。堂々と言うとは大したものだな」

呆れたように、しかしその声には怒りも含まれていた。

「…………彼がどうかしたのでしょうか？」

彼はこの会社の取引会社に勤めている。

もしかして、そのことで何か問題でもあったのだろうか？

「っは！彼ときたか！君のした事で我が社大変なことになっていたのだぞ？わかつているのか！！」

部長はとうとう怒りを私にぶつけて来た。

「な、何のことでしょう？」

泣きそうになるのを堪えながら一体何の事かをとにかく聞きたかった。

「まだとぼけるのか！！さすが、不倫をするような奴はしたたかなー！！」

部長の言葉に私は目を丸くしてしまった。

「ふ、不倫！？」

「ああ！そつだ！！まったく、よりにもよって倉井商事の娘婿に手を出すとは！！」

娘婿…………。

「あちらから身内に手を出すような社員を雇っている会社とは取引出来ないと言われたんだ！！君のせいでわが社は信頼をなくすところだった！！」

まさか…………。

そんな…………。

部長の言葉はすでに耳には入って来ていなかった。

「そんな社員はうちには必要ないからね。今日限り辞めてもらおう。わかつたら、さっさと荷物をまとめて帰ってくれ！」

部長は言うだけ言うとさっさと部屋を出て行ってしまった。

残された私も、部長室にいるわけにもいかず、茫然としたままその部屋を後にし、そのまま営業課に戻った。

営業課に戻ると、先程の女性がこちらに気付き近づいてきた。

「…………あなたの荷物邪魔だったから、あっちに置いておいたわ。」

さっさと片付けてお家に帰りなさい。こっちも急な異動で迷惑してるんだから」

指さした先はすでに課の外に段ボールに荷物が詰められて出されていた。

一体、何が起こったのかわからないまま、私は言われた通りそれを持ち、今までお世話になった課の皆に向かって一礼をしてその後にした。

「……………つう!?!」

会社の外に出ると持っていた荷物が手から滑り落ち、その場にしゃがみこんでしまった。

「……………どういふことよお……………」

私は携帯を取り出し、あわてて慶介に電話をした。

何回かコール音が聞こえ、途切れたかと思うと、いつも聞きなれていた声が聞こえて来た。

「……………はい」

「慶介……………」

「……………聞いたんだろう?」

彼の声は変わらない。

「そういう事だ。こっちもばれてしまって今大変なんだ。もう2度と電話もメールもしないでくれ」

そういふとすぐに電話は切れた。

その声に、その言葉にまったく悪びれた様子はなかった。

慶介とは大学の友達とコンパに行ったときに出会って、付き合い始めた。

奥さんのいたようなそぶりは何一つなかった……………と思う。

2年……。

付き合った期間は2年だ。

その間ずっと騙されていたのだろうか……。

驚きと落胆と自分への情けなさに、涙すらなげなかつた。

「……はっ……。男と会社を同時に失う何て……。なんかのドラマ見たい……。」

自嘲気味につぶやいた時、携帯が鳴った。

もしかして、慶介がかけなおしてきたのかもしれないと慌てて携帯を見てみるが、そこに表示されていた番号はまったく知らない番号だった。

「……はい……。」

「小倉さんの携帯でしょうか!？」

電話に出た相手の声に聞き覚えはなく、とても焦っているようだった。

「……はい、そうですが……。」

「小倉恋華さんですね!!落ち着いて聞いてください。今、あなたのお家から爆発のような火事がおきてご両親がおけがをされました。今、病院に向かっています!!」

電話から聞こえる声はあわただしくそれを伝えた。

「……火事……?……!!両親は!両親は無事なんですか

!？」

「落ち着いて下さい。今、病院に向かっていますが、お二人とも怪我  
がかなりひどいです。このままでは、命も危ない。今すぐ ×病院  
の方へいらしてください!!」

「わかりました!! すぐに向かいます!!」

そう言うと、携帯を切り、その場にあつた荷物を抱えタクシーに飛  
び乗った。

お父さん・・・お母さん・・・どうか無事でいて・・・。  
今まであつたことなどはすっかり忘れてタクシーの中で祈った。

「すみません!! 先程運ばれた小倉の家族です!!」

病院に着くなり受付に怒鳴り込んだ。

「・・・小倉さん!?! 今緊急治療室へ運ばれました。そちらへ行っ  
てください!!」

受付の人に言われるままいそいで緊急治療室へ向かった。  
なんだか、受付の人も切羽詰った感じだったのは気のせいだろうか?

「お父さん! お母さん!!」

緊急治療室の前に着くと看護師の人がそこで待っていた。

案内されて通された緊急治療室ではもうすでに片付けを行っていた。対面した時にはすでに父も母も息をしていなかった。

「お母さん！！お父さん！！」

泣き叫んでも父も母も戻ってくるはずはなく。家も焼けてしまい両親も失ってしまった。

その後、どうしたのかは全く覚えていない。

気付いた時には、父と母は私の手元から離れて今はおじいちゃんとおばあちゃんが眠るお墓で一緒に眠りについた。

「恋華ちゃん……。お父さんもお母さんも亡くしておじさんもおばさんと言いつらいんだけどね。恋華ちゃんはもう成人した大人だ。これから、一人でもやっていけるよね？」

お墓の前で話す伯父さんはお母さんのお兄さんだ。

「叔母さんたち、仕事で海外へ行く事になったの。恋華ちゃんももう大人だし一人暮らしして自分の事やって頂戴ね」

にっこりと笑う叔母さんはなんだか海外へ行くことが楽しみみの様で悲しいそぶりなど一切なかった。

「……大丈夫です。……私一人でもなんとかかりますから……」

病院に着いてからお葬式まで全て伯父さんにまかせつきりだった。これ以上迷惑をかけるわけにもいかず、一人で暮らす事を決めた。

それから、焼けてしまった家に帰りまだ何とか無事だった荷物をまとめるととりあえず伯父さんが用意してくれたホテルへと足を運んだ。

伯父さんたちは既に明日から海外へ出発するそうので、私が滞在するホテル代1週間分の支払いを先に済ませ早々に自分達の家へ帰って行った。

「これから、家も探さなくちゃ……」

ホテルの与えられた部屋へ足を踏み入れ体をベットに投げだすと、また止まっていた涙があふれ出した。

「……お父さん……お母さん……」

いなくなった事がどんどんリアルになっていく。それでも、どこかでまだ2人が生きているんじゃないかとふとした瞬間に思ってしまう。

「そんなわけないのにね……」

枕に顔を押し付け声を押し殺して泣いた。

その夜はそのまま泣き疲れて眠ってしまった。

次の朝目が覚めると、目がひりひりと痛く瞼が腫れていた。とりあえず顔を洗おうと洗面所に向かうと鏡に映っていた自分の顔に思わず苦笑してしまった。

「ふ……。汚い顔……」

自分をしっかりと見つめると、蛇口を思い切りひねり頭から水をかぶった。

しっかりと頭を冷やすと水を止めタオルで顔を拭いた。

「しっかりとしなきゃ！！これからは、私ひとりなんだ。いつまでもめそめそしてたらお父さんやお母さんに叱られちゃうわ！」

両頬を思い切りたたくと化粧を始めた。

「まずは住む家を見つけなくちゃね！」

少しでも気を緩めてしまうと溢れだしそんな涙をこらえしっかりと化粧が崩れないようにメイクを施した。

「……そうですか……」

これで5件目だ。

気合いを入れて家探しを初めて1週間。

ホテルもすでにチェックアウトをしてきた。

「……どうしよう。こんなに決まらないとは思わなかった……」

両親が他界し、叔父夫婦も海外へ旅立ってしまった。

家を借りるのにも保証人がいなければなかなか貸してもらえなかった。

その上、今は仕事をクビになってプー太郎だ。

「……もしかして私、今日からホームレス……？」

不動産を歩き回りつかれて行き着いた公園で一休みするも、これから先の事を思うと不安で仕方なかった。

「友達の所に行こうかな……」

しかし、友達のところに転がりこんでも、泊まれるのはせいぜい1・2泊だ。

それに友達はみんな仕事でいっぱいいっぱいだ。

「……これからどうしよう……」

頭を抱えて悩んでいると、ふと目の前が暗くなった。

何かと思ひ顔をあげてみるとそこにはサングラスをした黒ずくめの男が立っていた。

「え……？な、なに……」

「小倉 恋華さんですね？」

男は口を開いたかと思うと私の名前を口にした。

「は？え……はい、そうですけど……」

目の前に立つ男に見覚えはなかった。

いや、見覚えがあるとかないとかっていう前にもものすごく怪しい人物だ。

これは、逃げなければと両脇にあった荷物に手をかけた。

「篠井 尚人様より貴方をお迎えに行くよう申し付けました大西と申します」

足を踏み出し逃げようと思ったところで聞き覚えのある名前が出てきた。

「し、篠井……尚人……？」

「はい」

聞きたくもない名前だった。

「……篠井尚人がなんですって？」

思わず声が鋭くなってしまつ。

「貴方様を篠井家にお連れするようにとの事です」

は？お連れ・・・？

冗談じゃない！！

「お断りします！」

「そう言う訳には参りません。もとより貴方の意志に関係なくお連れするようになつておられますので・・・失礼します」

そついつと大西と名乗つた男は私を担ぎあげた。

「いやよ！！下ろしてよ！！」

手足をばたつかせてみるが大西はびくともしない。

「おい、小倉様のお荷物をお持ちしろ！」

大西が声をかけたかと思うともう一人の黒づくめの男が出てきて私の荷物を勝手に持つて行つてしまつた。

男たちが向かう先を見るとそこには真っ黒な高級車が止まっていた。

「おろして！！下ろしてつてば！！！」

大西の背中をぼこぼこ殴つてみるが全く効いていないのか涼しい顔をして車に近づいていく。

「ドアを開ける」

荷物を持っていた黒ずくめがドアを開けるとそつと下ろされ車に乗せられた。

「小倉様、申し訳ございませんが少しお静かにお願い致します」

座席に座らされ耳元でささやかれるとカチャッとシートベルトを締められ、車は動き出した。

車の中でも散々暴れてやった。

「到着いたしました」

なのに大西は全く乱れた様子もなく車の扉をあけた。すると着いた先はやはりというかなんというか……。

「……一体、なんで……」

目を開けると何度見ても二度と来ないと誓った家が建っていた。

「小倉様、どうぞ中にお入りください」

ここまで連れてこられてしまっってはもう抵抗する気力もなかった。大西の後に続いてその家へと足を踏み入れると、久しぶりに見るこの家の執事が現れた。

「恋華様。ご無沙汰いたしております。尚人様がお待ちです。どうぞ書斎の方へおいで下さい」

執事の鏡ともいえるお辞儀に私もその人の前で止まった。

「……敏爺……」

その執事の名を呼ぶとにっこりと笑い返してくれたが敏爺が言葉を発する事はなかった。

大西が先を促すと私は敏爺の前を通り過ぎ、長い廊下を歩き続けた。

見慣れた廊下……。  
見慣れた大きな扉の前に着くと大西が扉を叩いた。

コンコン

「小倉様をお連れしました」

すると中から聞きたくもない声が聞こえた。

「入れ」

「失礼致します」

大西が扉をあけると大西は中へ入る様に促し、私だけを中に入れそのままドアを閉めてしまった。

一人残されてしまった事に驚き、扉を開けようとしたがもうびくともしなかった。

「……恋華」

私の名前を呼ばれると、ビクッと肩がすくみそのままの体勢で固まっってしまった。

振り向かない私が癩に障ったのか後ろにいた男が近づいてくる気配がした。

「恋華」

次に名前を呼ばれた時にはすぐ後ろにいる事がわかった。

「……久しぶりだな。お前が逃げて以来か？」

いきなり肩に手が乗ってきた。  
突然の事に体が更に強張った。

「……………いい加減こっちを向け」

肩に置かれていた手に力が入り、無理やり振り向かされた。  
そこには、見たくもない顔が目の前にやりと笑っていた。

「イイザマだな」

歪んだ笑顔で私を見下ろす。

「俺から逃げてどうだった？楽しかったか？」

鋭い目で私を見てくる尚人に私は下唇を噛みしめながらうつむいた。  
すると、尚人はそれを許さないとでも言うように顎を掴むと顔を上げさせた。

「……………人が話しているときは人の目を見るものだろう？お前が  
良く言ってたよなあ？」

顎を掴まれている腕を振り払おうとするがびくともしない。

私は尚人を睨みつけると初めて言葉を発した。

「……………離して」

「はっ！久しぶりにあった婚約者に言う言葉がそれとは驚きだな」

そういうと掴まれていた手が離れた。



「婚約者なんかじゃないわ！」

思わず叫んでいた。

「……お前が俺にお願いしたんだろう？」なおとくんのお嫁さんにしてね』ってな」

いやらしい笑顔を顔に張り付けたまま尚人は全く私の前から動く気配はなかった。

「……一体いつの話をしてるの？そんなのは子供の戯言だわ」

私が言った言葉に尚人の顔からいやらしい笑顔が消えた。だけど、私は構わず続けた。

「大体あなたにはたくさんの女性がいるじゃない。わざわざ私に固執しなくてもいい筈だわ。いい加減私を開放して！」

目の前の尚人を見るだけで嫌な思い出が次々と蘇ってくる。

今すぐにもこの場から立ち去りたいのに、開かない扉と目の前に立っている尚人によってそれすら叶わなかった。

「……くっ」

目の前から笑いがこぼれる。

「解放？解放してやったじゃないか。逃げるお前の後を俺は追わな

かった」

確かに、あの時尚人は私を追いかけてくる事はなかった。ならなぜ今になって私はここに来ているのだ？

「……勘違いするな。お前の母親と俺の母親が約束をしていたんだ」

「……約束？……」

私がつぶやくと尚人は私の前から離れ自分の机の上にあった紙を取り上げ、こちらに投げた。

「それが証拠だ。お前にもし何かあった時は家で預かり育てるとな」

尚人の言葉に、私はその投げ捨てられた紙を拾い上げ目を通した。

「……もし自分たちに何かあったらお前を一人には出来ない。お前の母親が心配したんだろう。それを聞いた俺の母親がそれならば家で面倒をみると言ったそうだ。そして、わざわざそんなものまで作りやがった」

手元にある紙はただの紙ではなく尚人の母親との約束事が書かれた遺言状だった。

「まさか……そんな……」

こんな話は聞いたことがなかった。

こんな約束をしていたなんて……。

よく見ると日付は私がまだ幼かった頃だ。

「・・・それは祐子さんの遺言だ。俺の母親がそれを弁護士を通して承諾した。そういうわけでお前は今日からここに住むんだ」

尚人は信じられない事を言った。

「・・・この家に住む・・・？」

尚人の住むこの家に？

「・・・嫌よ！私はもう成人してるわ！一人でだって生活していき  
る！..!」

「・・・そんな事は俺の知った事じゃない。母さんがそれを承諾し  
た。俺がとやかく言う問題じゃない」

尚人は自分の机に戻ると机の上に置いてあった電話に手をかけ誰か  
と話しているようだった。

「そういう訳だ。ともかくお前は今日からこの家に住む事になる。  
あとは大西にでもきけ」

そういうと、先程まではびくともしなかった扉がひらき大西が現れ  
た。

「大西、そいつを部屋へ連れて行け。後の事は頼む」

大西は尚人に返事をすると思然とする私を立たせ部屋の外へと連れ  
出そうとした。

「ああ！そつだ！恋華。勘違いしないように言っておくが、婚約者だなんて思つなよ？あんなのはただの戯言だつたる？」

くっくくと笑つと犬を追いやるかのように手を振つた。

「ここが今日から小倉様のお部屋となります」

大西に連れられて着いた部屋は、ホテルのスイートルームかと思うような豪華な部屋だった。

呆然としたまま傍にあった椅子に腰を下ろすと大西がサングラスをとって私の前に立った。

なんだ……。

この人つてイケ面だったんだ……。  
思考停止気味の私の考えた事はそんなくだらない事だった。

「小倉様、こちらに住むにあたっての注意点を申し上げます」

私は返事もせずにはげつとしていた。

「まず、こちらの家に男性を連れ込む事をしないで下さい」

反応しない私の事を無視して大西は続ける。

「それから、尚人様のお部屋を訪ねることも控えて下さい。あなたはこの家に居候という事になります。しっかりとお立場を考えて行動なさってください」

大西は言い終わるとさっさと部屋を出て行ってしまった。

しばらく、何が何だかわからなかったが一人になり冷静になるとどんどん頭に血が上るのがわかった。

「……どういう事よ！！何が居候よ！！貴方達が勝手にここに連

れてきたんじゃない！！私は望んでなんかいないわ！！男連れ込むのだって男がいないのよ！！大体、尚人の部屋になんか行くわけないでしょ！！！！」

あまりの勝手な言い草に腹が立ちすぐそばにあったクッションを扉めがけて思い切り投げつけてやった。

「……どうしてよ……。お母さん……。」

なんで、こんな約束したのよ。

なんで、こんなところにいなければならないのよ。

なんで……。私を置いて死んでしまったの……。

久しぶりに見た母の文字に、母の思いに1週間我慢していた涙が溢れてきた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ふと気付くと窓から差し込む光は赤色に染まっていた。

「……寝ちゃったのね……。」

久しぶりに泣いてしまった。

部屋を歩いていると、お風呂に洗面所もついていた。

「……ホント、ホテルにいるみたいだわ……。」

ここが本当にホテルだったら良かったのに。

そしたら、こんな深い深いため息だつて出てこなかっただろう。

「でも、今の私はお金も仕事も保証人もいない……。どうしたらいいの……」

誰も答えてくれる事がないと解つていても思わず声に出て誰かに答えを教えて欲しかった。

コンコン

扉が叩かれる音が聞こえ、涙ぐんでいた顔をタオルで拭くと返事をして扉を開けた。

「はい？」

そこに立っていたのは敏爺だった。

「恋華様。お食事の準備が出来ました。どうぞ食堂の方へお越しください」

にっこりと笑う笑顔に思わず昔の面影を見つけたみたいで声をかけた。

「敏爺!! ねえ、私どうすればいいの!!」

昔は困っていたらさりげなく助けてくれる優しい敏爺が大好きだった。

敏爺はにっこりと笑ったままこちらを向くとゆっくりと口を開いた。

「……恋華様の思うとおりになされば良いのです」

一言ぞついでとまた敏爺は何も言わずにっこりとほほ笑んでいた。

敏爺に連れられ重い脚を何とか動かし食堂へと向かった。

扉を開け入った先には広々とした部屋の中にこれまた、どこの王族ですか？と、問いたくなるような長いテーブルが置かれていた。

「どうぞ、恋華様」

そう言つて椅子を引いてくれた敏爺にお礼を言つてその椅子に座つた。

座つたとたん、タイミングを見計らつたかのように食事が運ばれてくる。

まずは前菜。テーブルの上に写真から飛び出たようにきつちりと並べられたカトラリーに私は迷うことなく手を伸ばす。

物心ついた頃にはテーブルマナーは完璧に覚えていた。

それもまた、忌々しい思い出にすぎないが……。

「……おいしい……」

空腹のお腹には何を食べてもおいしいと感じるのだろうが、ここで出される食事は空腹でなくても美味しいと思わず声が出てしまう。

だけど、思ったより私はお腹がすいていたみたいで、しっかりと味わう前に全部平らげてしまった。

お腹もいっぱいになり食後に出てきたコーヒーに口をつけていると、扉が開き見たくもない顔が現れた。

「……なんだかんだ言いながらしっかり食べているじゃないか」

鼻で笑う尚人の言葉にぎろりと睨む。

「はっ！よくそんな顔が出来たもんだ。居候のくせにずづづしいな」

そついうと尚人は向かい側の席に腰を下ろした。

・・・向かい側と言っても随分と距離はあるが・・・。

「・・・私、家が決まり次第ここを出て行きます。それまでは、貴方も嫌でしょうがここに置いて下さい。お願いします」

尚人と会う事はないだろうと思っていたが、もし合う事が出来たならば言わなければいけないと思っていた。

今はどうしようもないから、嫌でもここに置いてもらわなければならない。

いくら、母同士が勝手に決めた事だとは言え、今の私には寝るところがあるだけでもありがたかった。

だから、悔しいが今はこいつに頭を下げる事に決めたのだ。

「ふん・・・。俺は関係ないといったはずだ。お前をここに連れてきたのは母親だからな」

尚人はそついうと運ばれてきた料理を口にして食事を始めた。

私も、これ以上話す事はなかったから、席を立ち頭を下げると部屋へと戻った。

「・・・まずは仕事を決めなきゃ・・・」

部屋に戻った私は備え付けの机の前に座りノートを広げた。

？ 仕事を決める！！

? 部屋を決める!!

? 二度と屋敷に近づかない!!

その3つを一番最初のページに大きく書きそれを眺めた。

小さいころから、目標をノートに書いてはそれを達成させて来た。

幼いころ、なんでも中途半端に投げ出していた私に母が1冊のノートを渡してくれて言った。

『恋華?なんでも途中で投げ出さない様に目標を決めましょう?そして、目標を達成させる為に頑張った事をこのノートに書きなさい。そして、投げ出しそうになったらそれを読み返しなさい。そうしたら、今まで頑張ってきた事を投げ出すなんてもつたない事、できないでしょう?』

その頃は母の言った意味がいまいちわからず、ただただ、可愛いノートを貰えた事が嬉しかった。

それでも、母の言うとおり目標を書き、そのノートに頑張った事、辛かった事を書き始め辞めたくなったらそれを読み返した。

その時初めて母の言った意味がわかった。

目標をやり遂げるだけじゃなく、それまでの過程も大事にしなきゃいけないってこと。

人間は壁にぶち当たって、それを乗り越えて色々な事を学んでいくんだってこと。

「……だから、これはお母さんが私に与えた試練なんだよね?」

ぽつりとそう呟いてみても返事はもちろんあるわけがない。

「私、ちゃんと乗り越えてみせるよ!」

そういうとノートをパタンと閉じて、着替えを済ませると仕事を探  
す為屋敷を後にした。

本屋で見つけた求人雑誌を手にとりそれを持って帰ると、条件の合うところ全てに連絡を入れた。

とにかく、今はどんな仕事でもいいから仕事を見つける事を優先した。

「・・・そうですか、はい・・・失礼します」

ピツと携帯を切ると思わずため息が出る。

「はぁ・・・これで23件目・・・」

雑誌にバツ印を着けると思わずベットへダイブした。

「なんでこんなに決まらないの!!!」

前の会社に就職するまでに面接に行った会社は2社だけだ。

いくら不景気とはいえ求人を探せばあった。

警沢を云わなければ働く事は出来た。

今回はあの時よりもラインを低くして探しているのに全くと言っていいほど手ごたえがなかった。

「どおして、面接すら断られちゃうわけ!?!」

こんなふかふかのベットにあたり散らすのは嫌だったけど思いつきりベットを殴った。

もしかしたら、アイツのせい・・・。

なんて考えてみたけど、そんなこととして奴の得になることなんてな

い。

そう思うとやはり自分が悪いのだろうかと落ち込んでしまっ

「……気分転換に外の空気でも吸ってこようかな……」

誰もいない部屋で一人ぶつぶつと会話する姿ははたから見れば怖いかもしれない。

だけど、今は何かを喋ってないと気分がどんどん沈んでいく。のそのそとベットから立ち上がると、少ない自分の荷物からカバンを取り出しそれを持って部屋を出た。

すると、それを知っていたかのように敏爺が目の前に立っていた。

「わあ！！びつくりしたあ！……敏爺なんでそんな所に立ってるの？」

首をかしげながら聞いてみても敏爺はにっこりと笑うだけで何も言わない。

ここにこしている敏爺の顔を見ているとそんな事がなんだかどうでも良くなってくる。

「……まあ、いつか。敏爺、私ちよつと外出てくるね！」

そういうと、いつてらっしやいませと敏爺が頭を下げる。

そんな敏爺に手を振ると私は賑わう町を目指して歩き出した。最寄りの駅まで着くとカバンから定期を取り出し電車にのる。

その定期も前の会社まで通う為のものだった。

なのに、今はぶらぶらと歩く為に使っている。そんな現状に思わずため息をつくときタイミングをはかったかのように電車が到着するべ

ルがなった。

「あゝ……。この人ごみ、落ち着くなあ」

昔から、なぜか一人になる事が嫌いだった私は、わざわざ人ごみの多いこの町によくやってくる。

人ごみをかき分け落ち着いたカフェに入り、窓際の席に着くとコーヒーを頼んだ。

窓の外は色々な人々が行きかっていた。

決して人ごみは嫌いじゃないし、むしろ落ち着くのだが、その中に入るよりこうして一枚フィルターを通して見ている事が何よりも好きなのだ。

「おまたせいたしました」

ぼけつと窓の外を眺めていたらコーヒーが運ばれてきた。

「ありがとうございます」

お礼を言うとウェイトレスのお姉さんにはっこりと笑った。

「今日も人が多いですね。ゆっくり休んでいてくださいね」

そう言うとお姉さんは持ち場に戻っていった。

お姉さんの言葉に思わず心があつたかくなる。

「……いいところ見つけちゃったな」

最近は運ぶだけが仕事だと思っているアルバイトの学生などでは到底でないであろう言葉にこころが暖かくなる。こういうカフェを私は貴重だと思っている。

そのお姉さんの後ろ姿を見つめているとふと、ある一定の所で目が

とまる。

そして、しばらくそれを眺めていると私は思い立って席を立った。

「あ、あのー!!」

私の声に振り向く先程のお姉さんは、急に話しかけられた事に驚いてはいたが再びあの優しい笑顔で答えてくれた。

「はい?どうされましたか?」

「あの貼り紙はまだ有効でしょうか!?!」

指さす先をお姉さんは見やると『ああ』と納得して答えた。

「ええ。こんな古びた所じゃ皆嫌がつて未だ募集中なの」

苦笑ともいえるその笑顔も可愛らしい。

「じゃ、じゃあ!私を雇ってくれませんか!?!」

あまりに必死に頼み込む私にお姉さんは一歩後ずさりながらも笑顔を崩さない。

「え、ええ。あ、でも、こんな古いところでもいいのかしら?どちらにしても、とりあえず履歴書を今度もってきてくれる?」

お姉さんの言葉に私は即座にカバンに手をやりそれを差し出した。

「これが私の履歴書です!?!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9353u/>

---

俺様と私の関係

2011年10月11日12時05分発行